

# ダウラターバードの要塞

石 黒 淳

はじめに

エローラの石窟寺院にもう何度通ったことであろうか。エローラの石窟寺院はデカン高原西部の都市アウランガーバードから北西に約二十五キロ、小高い岩山の麓に南北約二キロにわたって西面して開窟されている。インドで生まれた仏教、ヒンドゥー教、ジャイナ教の三大宗教の石窟寺院の数は三十四である。とくにそれらのほぼ中央部にある第十六窟のヒンドゥー教の岩石寺院カイラーサナータは荘厳で神々しい佇まいを見せ、よって代表されるエローラの石窟寺院は荘厳で神々しい佇まいを見せ、前方に果てしなく広がるデカン高原を見据えている。

一体全体これらの石窟寺院を誰が、何時、何のために、如何にして掘り出し、柱や内外壁を彫像などで美しく豪華に飾り、埋め尽くしたのであろうか。後世インドの人々は第十窟の壮麗なチャイテイヤ窟（礼拝堂）を「世界の建造者」ヴィシュヴァカルマン神の創造に帰し、ヴィシュヴァカルマン窟と呼んだとされるが、第十窟に限らずエローラの石窟寺院を見て回っているとそれら全てをヴィシュヴァカルマン神の建造

に帰したい気になる。インドにはデカン高原を中心に石窟寺院が千二百余りあるとされるが、エローラの石窟寺院はアジャンターの仏教石窟寺院とともにインドの至宝であろう。

ところで、バスでアウランガーバードからエローラに向かう途中、極めて魅力的で印象に残る要塞をもつ町ダウラターバードを通過する。この町の城門を通り抜けると道路（国道二百十一号）は曲がりくねった上り坂になり、バスはデカン高原に独特の台地の頂きに向かう。その上り坂から下方を眺めると、広大な平原地区に巡らされた入り組んだ城壁とその中に聳える一本のミナレット（尖塔）と、露出して屹立する巨大な円形状の岩山が目を見奪う。岩山の頂には小さな白っぽい宮殿も目に入る。エローラの行き帰りにこの難攻不落とも思われる天然に近い要塞を見るたびに心を奪われ、城の中に入り岩山の頂の要塞に立ちたいという強い思いに幾度となく駆られた。また、この要塞が建造された経緯すなわち背後にある歴史を知りたいと思った。今夏、エローラの石窟寺院の研究資料収集と調査の折、自由時間が持てたので三十年近く抱き続けた思いを二〇〇九年九月十一日に実行に移すことが出来た。

入口前方の黄褐色の小屋風のチケット売場で入場料二十五ルピー（約五十円）を払い、高さ数メートルの城壁に設けられたアーチ形の入口から城内に向かった。周囲を石積みの高い城壁に取り巻かれた迷路のような通路の先には巨大な木製の扉をもつ第二の城壁の入口があり、二つの入口を通り抜け城内に入った。続いて平坦な道を路肩に群がる野性の猿に見守られるようにして真つ直ぐ進み、要塞入口近くの城壁の木製の扉をもつ入口を再び通り抜け、高さ約五十メートルにわたり垂直に削られた岩山とその周囲に巡らされた濠に架けられた長さ十メートルほどの鉄

製の橋を渡り、木製の扉をもつ要塞入口に到った。この橋は元来木製の跳ね橋であったが危険なため近年作り変えられたものである。続いてすぐに岩山の中に掘られた階段を真っ暗闇の中、手探りで這うようにして登った。この通路は曲がりくねり幅は狭く、階段の高さも一定ではなかった。さらに天井にはコウモリが群生しており悪臭で満ち、足元はコウモリの糞だらけで滑りやすく危険であった。続いて剥き出しの険しい岩道を登り、高さ約百八十メートル（二百四十メートルとする説もある）の切り立つ岩山の頂の城塞に辿り着くことが出来た。感慨無量であった。この小論ではこのダウラターバードの要塞について、見学した印象も交え、その歴史について先学者の研究成果などを踏まえ簡単に紹

介してみたい。

### ダウラターバードの歴史

ダウラターバードはアウランガーバードの西北約十三キロにある小さな町である。ここは古代には、デカン高原西部の重要な交易都市プラティシュターナ（現パイターン）とインド中部で繁栄したウツジャイン（現ウジャイン）、アラビア海に面する西海岸、さらにはデカン高原中央部から南インドを結ぶ街道沿にあり、交易の中継地であったばかりでなく軍事的、戦略的な要衝の役割を果たしてきたとみられる。その真価は後述するように中世から近世にかけて北インドからデカン高原を縦断し、南インド半島部先端にまで進出したイスラームの軍勢によって証明されるが、古代から十二世紀に至るダウラターバードの歴史は霧に包まれぼんやりして推測の域を出ない。恐らくデカン高原西部の近隣諸国と同じ歴史の道を歩んでいたと思われる。

ダウラターバード近郊のアウランガーバードには前期（前一〜二世紀）と後期（六〜八世紀）の仏教石窟寺院がある。それらは小高い岩山の東側と西側に各々五窟、計十窟開窟されており第四窟（チャイティヤ窟）のみが前期窟である。エローラには後期の仏教石窟寺院がある。両者の仏教石窟寺院には寄進銘もなく開窟年代や開窟を支援した王朝は不明であるが、両者のほぼ中間地点にあるダウラターバードにも前一〜二世紀頃にはすでに仏教が伝わっていたと考えられる。



ダウラターバードの要塞全景



ダウラターバードの要塞

ではここでダウラターバードの歴史を知るためにデカン高原で興亡した諸王朝について概観してみたい。当時デカン高原を支配し、プラティシユターナを都として前期仏教石窟寺院の開窟にも積極的に関わったサータヴァーハナ朝（前二〜後三世紀）や一世紀後半から二世紀にかけてデカン高原北西部で勢力をもち、ナーシキヤ（現ナーシク）などの前期仏教石窟寺院の開窟にも関わったとされるサカ族のクシヤハラータ朝もダウラターバードに勢力を及ぼしていたとみられる。またこの地方は五〜六世紀にはアジャンターの後期仏教石窟寺院の開窟を援助したヴァーカータカ朝（三〜六世紀）が支配していたとみられ、ダウラターバードもその支配下に組み込まれていたかもしれない。あるいは六世紀頃から勢力を有した出身が定かではないカラチュリ朝も支配に関係していたかもしれない。さらにヴァーカータカ朝以降、七〜八世紀頃にはアウランガーバードやエローラの後期仏教石窟寺院が開窟されており、それらに



ダウラターバードの城内の入口



入口を見張る円筒形の塔

従事したこの地方の小王朝がダウラターバードを支配していたともみられる。要塞に変貌を遂げたダウラターバードの露出した岩山にも仏教石窟寺院が開窟されていたと考えられている。その後デカン高原西部一帯では仏教が衰退し、ヒンドゥー教を信奉する王朝が勢力をもち、ヒンドゥー教石窟寺院がエローラに開窟される。ヒンドゥー教の石積み寺院の造営もこの地方で開始されたとみられる。就も前期や後期に仏教石窟寺院を開窟した諸王朝はヒンドゥー教やジャイナ教に対しても常に寛容であったようである。

さて、ダウラターバードに影響を及ぼしたヒンドゥー教諸王朝としてはデカン高原南部バーダミーに都した初期西チャールキヤ朝（六〜八世紀）をはじめナーシクに都したラーシユトラクータ朝（八〜十世紀）、カリヤーニに都した後期西チャールキヤ朝（十〜十二世紀）などが挙げられる。しかしながらこれらヒンドゥー教諸王朝とダウラターバードとの関係は不明である。ダウラターバードがデカン高原西部の歴史の舞台に登場するのは既述したように十二世紀からである。

ダウラターバードは「神の山」を意味するデーヴァギリ（デーオーギリとも呼ばれる）という名で十二世紀末ヤドヴァ朝の都としてデカン高原西部の歴史に登場す



る。ヤーダヴァ家は後期西チャールキヤ朝の封臣として、独立以前はセーウナプラを都としていたことから刻文では専らセーヴナと呼ばれ、ナーシク地方を中心に治めていた小王国であったがピツラマ五世（在位一一七三〜九二年頃）の治下、宗主の弱体化に乗じて独立する。この独立に至る背景には当時の南インドの覇者チョーラ朝（九〜十三世紀）と、その支配下に組み込まれた南インドのヒンドゥー教諸王朝との間のデカン高原の領土をめぐる激しい戦闘が繰り返されたことがある。後期西チャールキヤ朝の衰退の原因の一つには自国の都カリヤーニをチョーラ軍に侵入されたことが挙げられる。彼らを撃退はしたものの弱体化した後期西チャールキヤ朝は封臣のヤーダヴァ家やホイサラ家に敗北を喫し、一一九〇年頃滅亡する。南インドの覇者チョーラ朝の勢力もまた衰える。彼らに代わって南インドで台頭するのがデカン高原西部デーヴァギリを都としたヤーダヴァ朝、デカン高原南部ドヴァーラサムドラ（現在のマイソール近くのハレービード）を都としたホイサラ朝、デカン高原東部ワランガルを都としたカーカティーヤ朝であった。これら三王朝もデカン高原の領土をめぐる戦闘を繰り返した。なかでもヤーダヴァ朝とホイサラ朝は激しく対立したとされる。いずれにしてもデーヴァギリはヤーダヴァ朝の都を兼ねた極めて堅固な天然の要塞として名を馳せていたと思われる。都にはヒンドゥー教やジャイナ教の石積み寺院も数多く建立されたとみられる。岩山にも今なおヒンドゥー教寺院址が散在している。

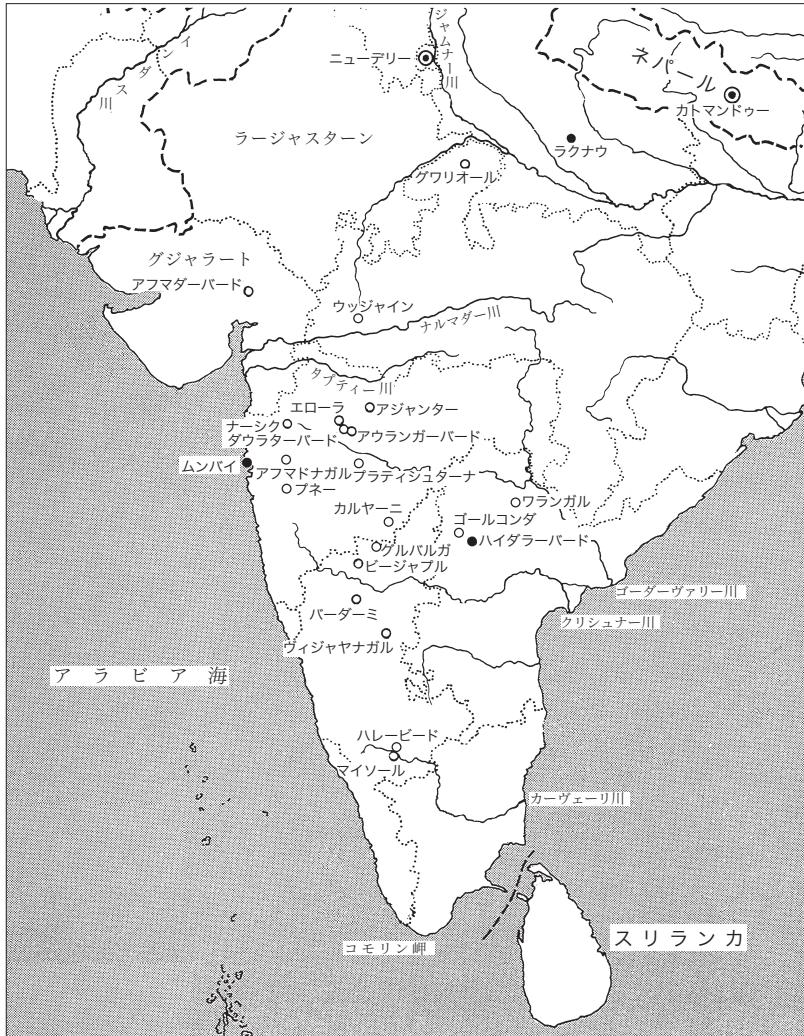
近年のプネー（プーナ）のデッカン大学<sup>カシジ</sup>による城内の発掘からは寺院建造物の断片をはじめシヴァ・リンガやガネーシヤ、マヒシャースラマルディニー、ミトウナといったヒンドゥー教の神像とともにアンピカー

をはじめマハーヴィーラ、リシャバナータといったジャイナ教の神像や祖師像も出土しており興味を引く。ヒンドゥー教の神像にはラーシュトラクータ朝や後期西チャールキヤ朝の様式とは異なり、肢体が硬く動きに乏しいホイサラ朝の影響が認められる。従って領土をめぐる激しく対立していたとされるヤーダヴァ朝とホイサラ朝ではあったが、両王朝の間には文芸の交流も活発になされていたことを窺わせる。しかしながらヤーダヴァ、ホイサラ、カーカティーヤの三王朝はいずれも十四世紀初めにハルジー朝（十三〜十四世紀）のマリック・カーフルに攻撃され滅亡し、デカン高原の歴史舞台から姿を消す。

ハルジー朝は北インド、デリーに都を置いたトルコ系のイスラーム王朝であり、第二代皇帝アラウッディーン・ハルジーは掠奪を企てデカン高原に遠征軍を送り、ヤーダヴァ朝の要塞都市デーヴァギリを攻め落とし、莫大な戦利品を手に入れたとされる。マリク・カーフルは第二代皇帝アラウッディーンに仕えた奴隷出身の宦官であったが重用され、デカン高原遠征軍の指揮をとり、既述したように三王朝を次々に征服し支配下に置き、半島南端部までイスラームの勢力を拡大させたとされる。ハルジー朝は治世わずか三十年にしてアラウッディーンの死後衰退し滅亡する。

ハルジー朝に続きデリーに成立したのは一二二〇年ギヤース・ウッディーン・トウグルクによって創始されたトウグルク朝である。同王朝の第二代皇帝ムハンマド・ビン・トウグルクは一二二七年から二八年にかけて都をデリー（ギヤース・ウッディーン・トウグルクによって現在のデリーの南東約十七キロの地に造営された大城塞都市トウグルカーバードを指す）から南に約一五〇〇キロ以上離れたデーヴァギリに遷し（約

ダウラターバードの要塞（石黒）



四十日間の行程とされる)、イスラームの新都城としてダウラターバードと改名する。因にダウラタはマラーティー語で富、財宝を、アーバードはベルシア語で町、都市を意味する。従ってダウラタ・アーバードすなわちダウラターバードは富、財宝の都の意味である。都を遷都とした

理由は不明とされるが、奇人で残忍な性格をもっていたと伝えられるムハンマドが率いるイスラーム軍が南インドから掠奪した大量の類まれな貴金属や寶石などの戦利品がダウラターバードに集められていたことが地名の由来かもしれない。あるいはムハンマドにとってはダウラターバードは南インドに対峙する軍事的、戦略的前線基地として財宝以上の価値をもっていたかもしれない。ところでムハンマドの治世代の出来事については、アラブ人旅行家イブン・バットウータが記録を残している。彼はムハンマドの治下の二二二三年から八年余りデリーに滞在し自らもダウラターバードを訪れている。それには、皇帝がダウラターバードを軍事的拠点にして内政を牛耳り、賊軍や謀反、反乱を企てる各地の太守、司令官をはじめ異を唱える法官らを処刑、惨殺していたことが生々しく語られている。ダウラターバードの都は遷都の七年後の一三三四年頃には手放され、首都は再びデリーに戻されるが、その後も要塞としての役割は続いたと思われる。十四世紀末の一三九八年ティムール軍が西北インドから侵入し、北インド一帯は踏み荒らされ、デリーも荒廃し、トウグルク朝は十五世紀初めには滅亡する。

ダウラターバードは十四世紀半ば（一三四

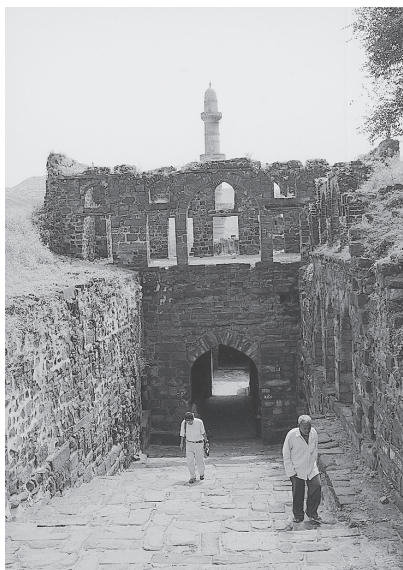
七年)、デカン高原で初めて生まれたイスラーム系王国バフマニー朝の領土に組み込まれる。バフマニー朝の創始者は皇帝ムハンマド・ビン・トゥグルクに仕えていたダウラターバードの太守ザファル・ハーン(バフマーン・シャー)である。バフマニー朝の名の由来の一つには彼が古代ペルシアのバフマーン王の子孫と称したことにあるとされる。都はダウラターバードからグルバルガに遷される。バフマニー朝はその後二世紀の間デカン高原北部を支配するが、南部のヴィジャヤナガルをはじめとするヒンドゥー王国や北部ラージャスターンやグジャラートのイスラーム王国と戦いを繰り返し、内政では宗派対立が生じ、十五世紀末には衰退する。バフマニー朝の弱体化に乗じ、デカン高原には五つのムスリム王国ームスリム五王国が成立する。ダウラターバード州総督アフマド・ニザーム・シャーが独立し、ムスリム五王国の一つニザム・シャー王国を誕生させ、都をアフマドナガルとする(ニザム・シャー王国はアフマドナガル王国とも呼ばれる)。アフマドナガルは一六〇〇年にはムガル朝第三代皇帝アクバルのデカン遠征で陥落するが、ダウラターバードは独立を保ったとされる。しかもアビシニア人で奴隷であったマリク・アンバーが、デカン高原南部のムスリム五王国の一つビー

ジャブルやデカン高原東部のやはりムスリム五王国の一つゴールコンダ王国からの援助軍を結集させ、ムガル朝に果敢に立ち向かっていた。ダウラターバードはムガル軍に対して要塞としての真価を十二分に発揮していたとみられる。マリク・アンバーの息子ファテ・シャーはアフマドナガル王国のニザム・シャーを捕え、処刑し、ムガル朝第五代皇帝シャー・ジャハーンに讓歩しようとしたが、ビージャブル王国に説き伏せられムガル軍と戦い続けたとされる。ムガル朝の將軍マハバト・ハーン

はこれまで誰一人為し遂げることが出来なかつたダウラターバードの獲得を要塞を攻撃して達成しようとして決意したとされる。最後にはファテ・シャーはマハバト・ハーンに和を請い、法外な年金とともにダウラターバードからの撤退を約束させられたが、それは守られなかつた。彼はグワリオールに送られ亡くなるまで幽閉されたとされる。

いづれにしてもムガル朝時代(十六〜十九世紀)には第五代皇帝シャー・ジャハーン(在位一六二八〜五八年)から第六代皇帝アウランガゼーブ(在位一六五八〜一七〇七年)の二人の皇帝時代にデカン高原へのムガル軍の出兵が頻繁に行われた。とくにアウランガゼーブとデカン高原との結びつきが目立つ。彼は皇子時代には一六三五年と五年の再度にわたりデカン高原西部の太守に任じられ、マラーター王国の反乱に立ち向かい、兄弟間での帝位継承戦争の折にはデカン高原で帝位を得る機会を窺っていた。ダウラターバードの要塞が彼を大いに助けていたと思われる。周知のようにアウランガゼーブは彼の名に由来するデカン高原西部の都市である。ここには王妃の墓廟ビービー・カ・マクバランがあり、デカン高原で生まれ、デカン高原で亡くなった彼自身の墓も、エローラに通じる国道二百一十一号沿いのエローラの南三キロのクルダグバードの聖者廟の境内の一角にひっそりと建てられている。アウランガゼーブの死後ダウラターバードは、ムガル朝下のデカン高原の長官であり、ハイダラーバード藩王国の創建者になるニザーム・アルムルクに奪われる。続いてダウラターバードはデカン高原の強力なヒンドゥー王国マラーターに讓渡されるが、一七六一年、北インド、パーニーパットの戦いでマラーター軍がアフガーン人の王である狂暴な略奪者アフマド・シャー・ドゥッラーニーに惨敗し、ダウラターバードは再びハイダ





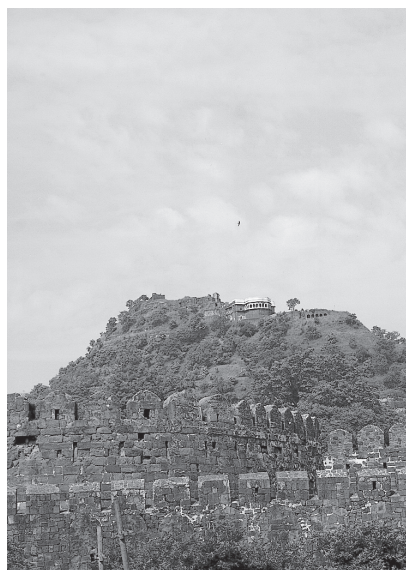
要塞入口



ダウラターバード城内の要塞に向かう道



城内から出土したリング



ダウラターバードの要塞

ラーバード藩王国の領土に組み込まれた。

以上、要塞都市デーヴァギリに始まるダウラターバードの目紛しい歴史について概観した。十二世紀から十八世紀にかけてこの要塞はデカン高原を舞台に絶え間なく繰り返される戦闘に巻き込まれながらもそれらを恐れず粘り強く耐えてきたように思われる。城内には岩山の頂の要塞に至るまで時代を異にする数多くの記念碑的建造物が散在している。それらについては出土品とともに別の機会に紹介し考察してみたい。

### 追記

デカン高原は雨期(六〜九月)と乾期(十〜五月)で自然の様相を大きく変化させる。ダウラターバードの要塞も例外ではなく雨期には要塞は草木の緑に覆われ、乾期には岩山が黒っぽく剥き出しになる。挿図に用いた要塞の全景写真二枚は乾期に撮影したものである。

ところで、ダウラターバードの要塞のある岩山の頂には筆者一人で登ったのではない。同行した二十人余りのグループの中でバスからこの広大な都城址と要塞とを見て感動した日本の城郭について研究している石川欽一君(愛知学院大学の大学院生)が同行してくれた。石川君のほかに河合陽兵君(南山大二年生)、金子春海さん(社会人聴講生)も一緒であった。彼ら三人が一緒だったので心強い限りであった。筆者は要塞や城郭の構造などについては門外漢であるが、石川君からはいろいろ説明を受け感謝している。

### 参考文献

ロミラ・ターバル(幸島昇・小西正捷・山崎元一訳)『インド史』2、みすず

書房、一九七二

サティーシユ・チャンドラ(小名康之・長島弘訳)『中世インドの歴史』山川出版社、一九九〇

『岩波講座 世界歴史13 中世7』岩波書店、一九七一

幸島昇編『南アジア史2 中世・近世』『同3 南インド』山川出版社、二〇〇七

山崎利男『悠久のインド・ビジュアル版世界の歴史④』講談社、一九八〇

荒松雄『中世インドの権力と宗教』岩波書店、一九八九

石田保昭『ムガル帝国』吉川弘文館、一九八二

イブンバトウータ・イブン・ジュザイイ編(家島彦一訳注)『大旅行記5』東

洋文庫675、平凡社、二〇〇〇

ベルニエ(関美奈子・倉田信子・小名康之・赤木昭三訳)『ムガル帝国史』

17・18世紀大旅行記叢書5、岩波書店、一九九三

神谷武夫『インド建築案内』TOTO出版、一九九六

幸島昇他編『南アジアを知る事典』平凡社、二〇〇二

貝塚茂樹他編『アジア歴史辞典』平凡社、一九七五

Christopher Tadgell, *The History of Architecture in India*, London, 1990.

Virginia Fass, *The Forts of India*, London, 1986.

Joseph E. Schwartzberg, *A Historical Atlas of South Asia*, Chicago and London, 1978.